

◆ グループワークの課題

「本人が在宅でよりよく生活するためにどのような支援が考えられますか？
それぞれの専門職の立場から考えてみて下さい」

◆◆ 意見

・本人の思い通りにやっっていこうとすると、うまくいかないことが多いと思う。他者との関わりがあまりないということが一番の原因。

また、長女や次女が、ある程度ここまではやるといったゴールを決め、それ以降は次のステップとして考えていかなければいけない。それをチームで共有していけば打開策が見つけられるのではないかな。

・娘さんの拒否が強いことがストレスになっており、同居に結びつくのがどうかというところがかなりのポイントで大きな問題。

長女の認知症に対する理解度の教育を関係者で行い、介助の仕方をヘルパーに近づけ、それでも排せつ介助に対する拒否が強いのかどうか試してはどうか。

本人と長女は自宅での生活を望んでいるが、この生活、この状態を続けて行くことは本人にとって良いものなのか。次女は排泄が難しければ施設へと行っておられ、現状難しい状態でもあり、在宅を続けていくことが本人のためになるのかどうか。

・長女の介護の仕方について。声かけや技術もあるのかもしれないが、本人は長女に介護されるのがいやなのではないか。長女は過度に関わっているのでは？長女が帰ったあと、本人は何もできなくなる日が数日続くということは、できることを長女が全て行っている可能性があり、母はそれを嫌うのではないかな。

できる限り長女と本人の距離感を皆で考えていくほうが良い。できることはサービスに任せる。長女と母の関係は良好だと思うので、ある程度の距離感があれば、長女が家にいてくれて嬉しい、母の面倒を看てあげれて嬉しいといったような、お互いに良い距離感が保てるのではないかな。

・長女がやりすぎているのではないかな。排泄をするとき母親の暴言があったり、本人が嫌がっているのにそれでも長女がしている。それは、ある意味母を虐待しているのではと見てしまう。長女はもう少し身を引いて、言い過ぎかもしれないが親孝行の押し付けみたいなことを少し感じる。

この事例をみたときに思い付いたのは、介護の社会化。それを長女が理解し、身体介護は専門に任せ、長女が毎月帰省することで精神面のフォローをする。そうすれば母の精神も安定し良いのではないかな。

私もこういった案件で成年後見や保佐、補助を持っているが、長谷川氏が6点ということで、後見類型にあたる人だと思う。私が仮にこの方の後見人になったとしたら、財産状況は分からないが、元教員で年金もそれなりだと思うので、力いっぱい色々なサービスを入れる。相性の良し悪しがあるが、色々試して本人の気に入るような人を見つけ、本人がなるべく長い間自宅で生活できるよう、より良い生活できるよ

う協力したい。いよいよとなれば施設も考えるが、それまでは力いっぱい色々なサービスを入れたいと思った。

長女が行っている金銭管理について。通常年金は本人口座に入る。金融機関は本人でなければ応じないため、本人を連れてこいと言われることもある。そういったことを解消するのが成年後見人。長女が成年後見人になるという方法もあるが、離れていると裁判所が少し躊躇されることもある。実際わたしが受けた例では、私と県外の娘さんとが成年後見になり対応した。財産管理は弁護士が、心療看護面は娘が担う。限られた関わりになるが、もし長女のストレスの原因のひとつに金銭管理があるなら、ストレス軽減のために成年後見人制度を使うのもよいのではないか。

成年後見の社会化も一般的になっており、今の申し立て案件の3割は家族、7割は第三者が成年後見人である。日本で2000年に出来た制度ですが、だんだんと浸透してきているなど感じている。

・チームとして予後予測、チームの向かう方向性がどうなのかなと気になった。なにかトラブルがあったとき、ヘルパーが発見してからケアマネへ、訪問看護から先生へという流れがタイム的にどうなのか。訪問看護は本人の様子をみないと先生に伝えることができないし、先生からすると共通言語の看護師から連絡を受けたほうが一番良いに決まっている。チームとしてヘルパーさん、ご近所さんを含め緊急時の対応を、誰が連絡をとっても先生とうまく繋がる、うまく判断できる状況を確立することが大事だと思う。

長女がうまくいかなくなると介護自体がうまく成り立たなくなる。長女の支援も章立てとして一本必要なのかなと…。母と関わりながらのコミュニケーションでうまくいっていない部分を、今後のことも含め共有できるような相手を作るとか、家族会やピアカウンセリングができるような関係性も必要かなと思う。

そして、本人は本当に自宅で暮らしていきたいのか？本人の言葉はある意味デマンドなのか本当の意味でニーズなのか…。

本人が出来ること出来ないこと、支援が必要なこと必要でないことを、ヘルパーなど普段関わる人からみて、適切に関わることができているのか？関わり始めから6年で、支援の輪の中に近所の人との関係性が入っていたかどうか。得意なことや出来る事、活かせることなど関係性が難しくなっているかもですが、そのあたりも含め、長谷川式で6点であっても、アプローチの方法によっては本人が自宅で生活できると実感できるような関わり方について、ある程度まだ余地があるのかなと感じた。